

子ども歌舞伎をモチーフに蒔絵の技術とガラスの融合。新たな文化創生の可能性。

長浜に400年以上続く「長浜曳山まつり」。動く美術館とも言われる13基の曳山や、そこで奉納される子ども歌舞伎の芸術性はかけがえのない貴重な財産です。このプロジェクトには芸術性をガラスというマテリアルに反映し、より多くの方と感動を分かち合いたいとの思いが内包されています。このプロジェクトを機会に関わった様々な人々が新たなガラス文化創生に喜びを感じ、文化情報を発信することで、今まで見えてこなかったシビックプライドが生まれればと思います。

3回のプレゼンを終えて

3Dプリンターによるモックアップを制作。

ガラス素地を作成して蒔絵で彩色。

大阪芸術大学プロダクトデザイン科の学生さんのデザインの中で最終選考に残ったものを、3Dプリンターでモックアップを作成し着色をしていました。仕上がったデザインとガラス素地を蒔絵職人の下司氏にお渡しして蒔絵を施してもらいました。平面でデザインしたときと比べて立体では想像以上に難しく、形状と描画に不具合が生じたり技術的に不可能なこともありましたが、可能な範囲でデザインに近づけてそれぞれの試作が完成しました。

試作品は、漆独特の風合いやガラス素材の屈折・透過の効果が複雑に絡み合い、学生さんが持つ大胆で新鮮な発想のグラスが仕上がりました。コストや技術面で量産は難しい部分がありますが、様々な可能性を感じさせてくれる内容となりました。



ガラス工芸コースによる ガラス素地の制作。

大阪芸術大学ガラス工芸コースの山野宏教授と学生さんにより、「HIKIYAMA 漆ガラス」のガラス素地制作をしていただきました。プロダクトデザインコースの学生さんから提案されたガラス杯の3Dモックアップに合わせて金型を作り生徒と打ち合わせをしながら、理想的なガラス素地を仕上げていきます。大学内では各コースをまたいだ共同作業はあまり行われないことから、今回の機会はとても貴重な経験だったという学生さんの意見も聞かれるなど、とても有意義な繋がりができました。仕上がったガラス素地は学生さんの確認を経て漆彩色のためにデザイン画と併せて蒔絵職人の下司氏へ送られました。

蒔絵の伝統的な手わざを ガラス杯に彩色。



大阪芸術大学から送られてきたデザイン画に基づき、ガラス素地に一つひとつ丁寧に蒔絵を施していきます。近年の漆素材は、ガラスや新素材に対して密着性の良い新技術が開発されており、表現の幅が広がっています。デザイン画に基づいて彩色していく際に提案どおりにいかない部分や不可能な部分が一部発生しましたが、下司氏は熟練のセンスと手わざで最適な彩色へアレンジし、自然な完成度へ導いていきました。

HIKIYAMA 漆ガラスの今後の展開について。

子ども歌舞伎衣装の色や絵柄をプロダクトデザインに落とし込み、ガラスならではの色彩と象形を想像することを目指した「HIKIYAMA 漆ガラス」は、試作の段階ですでに今までの現代ガラスにはない美しいものが幾つか生まれました。

蒔絵の技術は表現が優美であると比例して手間や時間、高価な金箔や螺鈿を使用するため販売価格が高額になり、市場への普及が難しくなります。そこで実際に手仕事で仕上げた作品は、フラッグシップとして位置付けし、製作技術を簡素化したデザインや技法で展開する方法を模索していく必要があるといえます。

